第4章

ことばの働きについての知識
―話者の視点を中心に―

山　田　義　裕

1．ことばの働きについての知識

私たちはことばについて2つのタイプの知識、すなわち、仕組み（構造）についての知識と働き（使用）についての知識を持っている。ことばの仕組みについての知識とは、単一の文を作り出したり理解したりすることを可能にする、文の構造に関する知識である。私たちは、このタイプの知識とは別に、ことばの働き・使用についての知識をもっている。ことばの使用というのは、機能的には、情報の伝達と考えてよい。情報伝達という観点から見た場合、ことばの使用には、通例、図のように、話し手、聞き手、伝える情報という3つのファクターが関わっている。

(1)　話し手 ―――――― 情報 ――――――▶聞き手
　　（出来事、考え等）

つまり、言語使用は、話し手が、ある出来事なり、考えなりを言語化しそれを情報として聞き手に伝える行為とみなすことができる。話し手は、自分が見たり聞いたりした出来事を聞き手に伝える際に、それを言語表現の形にするわけであるが、一つの出来事が一つの表現と一対一に対応しているのではもちろんない。たとえば、「太郎が花子に本を渡した」という出来事を日本語で記述する場合(2)のように少なくとも二つの表現が可能である。

(2)　a．太郎は花子に本をやった／あげた。
　　b．太郎は花子に本をくれた。

あるいは、「ジョンが妻のメリーにキスをした」という状況を英語で表そうとした場合、(3)のような複数の表現が可能である。

(3) a. John kissed Mary.
b. John kissed his wife.
c. Mary was kissed by John.
d. Mary was kissed by her husband.

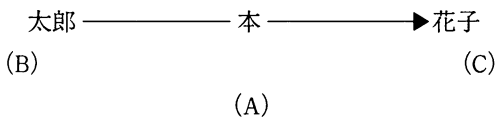
上の表現は、文脈を抜きにして考えた場合、つまり文の構造という観点から見た場合は、すべて適格な文である。現実の言語使用では、私たちはこういった同じ意味内容をもつ複数可能な表現からどれか一つを選んで用いているが、その際無差別に選択しているのではない。いくつかある可能な表現のうち、その状況においてもっとも適切なものをほぼ意識せずに選んで用いている。この際に私たちが無意識に用いている知識をここで「ことばの働きについての知識」と呼ぶことにする。

この講義では、このタイプの知識の一つとして「話しての視点」という概念を取り上げ、この概念あるいはこれまで提案されてきたこの概念に基づく原理を、「ことばの働きについての知識」という観点からとらえ直し紹介する。

2. 話し手の視点

私たちは、ある出来事を見る場合、その出来事に関わっている人や物をすべて等距離から眺める場合もあれば、誰か特定の人あるいは物に焦点をあてて眺める場合もある。出来事を眺めるときの、見る人の立場を視点という。視点は、私たちがことばを用いる場合に、非常に重要な働きをしている。ことばの使用において重要なのは、「話し手の視点」である。何故、「話し手の視点」がことばの使用において重要かというと、話し手がある出来事を聞き手に伝えるときに、その出来事に関わるどの人物に視点を置くかで用いる言語表現が変わってくる場合があるからである。例えば、太郎が花子に本を渡したという状況を考えてみよう。

(4)



この状況を、話し手が太郎よりの視点(B)、花子よりの視点(C)、二人から等距離の視点(A)で観察して伝える場合の表現はそれぞれどうなるであろうか。図(4A)の客観的視点をとった場合は、(5a)となる。太郎よりの視点をとった場合も同じ表現である。しかし、花子よりの視点をとった場合は、(5a,b)の「やる」という言い方はできず、(5c)のように「くれる」を用いなくてはならない。[1]

(5)　a．太郎は花子に本を<u>やった</u>。(中立の視点)
　　b．太郎は花子に本を<u>やった</u>。(太郎よりの視点)
　　c．太郎は花子に本を<u>くれた</u>。(花子よりの視点)

この現象を、「ことばの働きについての知識」という観点から考えてみよう。ことばの働き（使用）についての知識とは、あることを表す複数可能な表現（文）から、その状況にもっとも適切なものを選ぶ際に用いている知識であると述べた。今述べた現象は、この観点から次のようにいうことができる。つまり、話し手は、聞き手に(4)の出来事を伝える際に二つの可能な表現のうち適切な方を自分の視点がどこにあるかを基準に（ほぼ無意識的に）選んでいるのである。こう考えると、話し手の視点という概念は、私たちがことばを使用する際に用いる「ことばの働きについての知識」の一つととらえることができる。

久野　暲は一連の視点研究で、話し手の視点に関して、次の一般原則があると述べている。

(6)　視点の一貫性
　　単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない。

(7)　共感度（Degree of Empaty）
　　文により記述されている出来事に関係している人や物(x)に対する話し手の自己同一視化を共感(empathy)と呼び、その度合い、即ち共感度をE(x)で表す。共感度は、値0（客観描写）から値1（完全な同一視化）迄

(1)　日本語の視点表現には方言差がある。ここでは、東京方言を基準とする。

の連続体である。[2]

(6)、(7)は、直感的な述べ方をすると、「話し手の視点は一つの文において一貫していなくてはならない」という原則である。久野はそれを共感度(Degree of Empathy)という概念を用いて精密化した。私たちがことばを用いる際に、自分の視点が一貫していなくてはならないというのは直感的にはごく自然な原則に思える。しかし、直感的に自然な原則が常に正しいとは限らない。事実に基づいて検証する必要がある。久野は、この原則を様々な視点現象に基づき経験的に妥当な原則であることを示した。以下では、いくつかの視点現象をとりあげて、視点の一貫性の原則がことばの使用にどのように反映されているかを見ていく。具体的言語事実を見ていく前に、久野(1978)、Kuno (1987)等で提案されている視点現象に関する仮説をいくつか見ていく。

久野は視点現象に関して、(8)〜(10)の仮説を提案している。まず、(8)を見ていく。日本語の動詞には、話し手の視点が重要な役割を果たす「視点動詞」が多数ある。その代表例は授与動詞「やる／くれる」である。授与動詞「やる／くれる」は、先ほど見たように、次の視点制約を受けるといわれている。

(8) 授与動詞の視点制約

くれる：E（与格目的語）＞E（主語）

やる　：E（主語）≧E（与格目的語）

「くれる」という動詞は、話し手の視点が主語（与える人）よりも「〜に」で示される与格目的語（受け取る人）よりの時のみ用いられる。一方、「やる」は、話し手の視点が、主語に近いか、中立の時に用いられる。

---

(2) (7)のE(x)という共感度の表記は、分かりやすくいうと、話し手が文中のxにどれだけ自分の視点を近づけているかその程度を表すのに用いる。例えば、文中に太郎と花子がでてくるとしよう。話し手の、太郎と花子に対する視点の近さは、それぞれE（太郎）、E（花子）と表記される。話し手の視点が太郎により近い場合は、E（太郎）＞E（花子）、逆の場合はE（花子）＞E（太郎）と不等号で表す。(6)の共感度に矛盾があってはいけないというのは、E（太郎）＞E（花子）とE（太郎）＜E（花子）が同時に成り立ってはいけないと言うことである。

(9)　発話当事者の視点ハイアラキー

話し手は、常に自分の視点をとらねばならず、自分より他人よりの視点をとることができない。　E（話し手）＞E（他人）

これは、自分が関わった出来事（例えば、「私は花子にキスした」という出来事）を相手に伝える場合、視点は常に自分自身、つまり話し手自身にあるというごく自然な仮定である。

(10)　談話主題の視点ハイアラキー

談話の主題となっている人に視点を近づける方が、そうでない人に視点を近づけるより容易である。E（談話主題）≧E（その他）

(10)は既に談話に登場して談話の主題になっている人は、新たに談話に登場した人よりも視点を近づけやすいという主旨の仮説である。

これらの視点現象についての仮説を仮定することで、様々な言語事実が視点の一貫性の原則(6)で説明できることを次にみていく。(11)～(13)の例について、私たちはそれぞれが適格な文か不適格な文かについての直感をもっている。

(11)　a．ぼくが太郎にお金をやった。
　　b．*太郎がぼくにお金をやった。
　　c．*ぼくが太郎にお金をくれた。
　　d．　太郎がぼくにお金をくれた。

(12)　a．きのう、パーティーで太郎に会った。そこで、彼はある女性に指輪をやった。
　　b．きのう、パーティーで太郎に会った。そこで、ある女性が彼に指輪をやった。
　　c．*きのう、パーティーで太郎に会った。そこで、彼はある女性に指輪をくれた。
　　d．きのう、パーティーで太郎に会った。そこで、ある女性が彼に指輪をくれた。

(13)　a．太郎が花子にプレゼントをやったのに、花子は太郎になにもやらなかった。

b．太郎が花子にプレゼントをやったのに、花子は太郎になにもくれなかった。

c．太郎が花子にプレゼントをくれたのに、花子は太郎になにもやらなかった。

d．＊太郎が花子にプレゼントをくれたのに、花子は太郎になにもくれなかった。

(11)の各例文では、「ぼく」と「太郎」の視点関係に２つの制約が関係している。一つは、発話当事者のハイアラキーでもう一つは授与動詞の視点制約である。この二つの制約から、「ぼく」と「太郎」の視点関係は(14)のようになる。

(14)	発話当事者の視点ハイアラキー	授与動詞の視点制約
a．	E（ぼく）＞E（太郎）	E（ぼく）≧E（太郎）
b．	＊E（ぼく）＞E（太郎）	E（ぼく）≦E（太郎）
c．	＊E（ぼく）＞E（太郎）	E（ぼく）＜E（太郎）
d．	E（ぼく）＞E（太郎）	E（ぼく）＞E（太郎）

(11b,c)は、(14b,c)から分かるように、「ぼく」と「太郎」の視点関係に矛盾がある。それ故、視点の一貫性の原則に違反しており不適格であるという説明ができる。

(12)の例文では、「彼」と「ある女性」との視点関係に談話主題のハイアラキーと授与動詞のハイアラキーが関係している。

(15)	談話主題のハイアラキー	授与動詞の視点制約
a．	E（彼）≧E（ある女性）	E（彼）≧E（ある女性）
b．	E（彼）≧E（ある女性）	E（彼）≦E（ある女性）[3]
c．	＊E（彼）≧E（ある女性）	E（彼）＜E（ある女性）
d．	E（彼）≧E（ある女性）	E（彼）＞E（ある女性）

(15)が示すように(12)の例でも同様に、視点の一貫性が保たれている例は適格文

(3)　(15b)、(16a) は視点が中立の時のみ視点関係に矛盾がないことを示している。

だが、視点関係に矛盾があるものは、不自然な文になる。

⒀は、一つの文が視点動詞「やる／くれる」を含む二つの節からなっている。視点の一貫性の原理からこの二つの節の「太郎」と「花子」の視点関係は矛盾していてはいけない。それぞれの文の「太郎」と「花子」の視点関係は次の通りである。

⒃	授与動詞の視点制約（従属節）	授与動詞の視点制約（主節）
a．	E（太郎）≧E（花子）	E（太郎）≦E（花子）
b．	E（太郎）≧E（花子）	E（太郎）＞E（花子）
c．	E（太郎）＜E（花子）	E（太郎）≦E（花子）
d．	＊E（太郎）＜E（花子）	E（太郎）＞E（花子）

これまでの例と全く同様に視点の一貫性の原則に違反する例は不適格となる。

このように、⑾～⒀の現象は、⑻～⑽の視点制約を仮定することで、全て視点の一貫性の原理⑹により自然な説明が可能となる。

ここでもう一度注意しておきたいのは、これらの例はすべて日本語の文構造という点から見れば正しい文であるということである。しかし、現実の発話では、今見たように適格な文と不適格な文があり、私たちはそれを明確に判断する直感をもっている。この直感の裏にあるのは、ことばの仕組みについての知識ではなく、ことばの働き・使用に関わる知識である。視点の一貫性という原則は、私たちのこの種の言語直感を支えている「ことばの働きについての知識」の一つと考えられる。

３．日本語と英語の視点現象の比較

この節では、まず「視点の移行」という考え方を紹介し、更に日英語の往来動詞・指示要素等のダイクシス（deixis）に関わる表現の用法を比較することで、この視点現象に関する言語／方言間の差異を考える。英語の go は、意味上、日本語の「行く」に come は「来る」に対応する。しかし、よく知られているように日本語の「行く／来る」と英語の go/come の用法は、完全に一致しているわけではない。例えば、次の会話を比べてみよう。

(17) お母さん：太郎、ごはんができましたよ。
太郎：いま行くよ。 ／ *いま来るよ。

(18) Mother: Dinner's ready, Taro.
Taro : I'm coming. ／ * I'm going.

太郎が、おかあさんに呼ばれて食堂に行くのに、日本語では「行く」を用い「来る」用いない。しかし、英語では、同じ状況で日本語とは逆に、「来る」に相当する come を用い go は用いない。(4)

日本語と英語のこのような違いがどういった要因によるものかを探る上で、まず「行く・来る」と go/come の基本的な意味を考える必要がある。大江(1975:45)は、「行く／来る」の意味の違いを、様々な例に基づき(19)のように定義している。

(19) a．行く：話し手または他者が話し手ののホームベースを出発して、その動きを話し手が出発点から眺め、描く。
b．来る：話し手が自らのホームベースに位置し、話し手または他者の動きをその場所（到着点）への動きとして眺め、描く。

この定義は「話し手の視点」という観点からとらえ直すと、次のように図示することができる。

---

(4) これと同じコントラストは、次の例が示すとおり、英語の take-bring とそれに対応する日本語の「連れていく・連れてくる」にも見られる。
a．あなたの家に赤ちゃんを連れて行きます／*連れて来ます。
b．I'll bring / * take my baby to your house.
これらの例から分かるように、日本語で「連れて行く」と言う状況で、英語では「連れて来る」に相当する bring を用いる。bring の用法についての方言上のゆれについては Fillmore (1966) を参照。

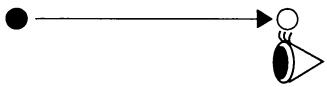
(20)　●：動く主体／出発点側の人　○：到着点側の人

ａ．行く：視点は出発点

出発点　　到着点

ｂ．来る：視点は到着点

出発点　　到着点



「行く」の場合の話し手の視点は出発点にあり、「来る」では、視点は到着点側の人にある。つまり、「行く」は「話し手の視点」から遠ざかる動きを指し、一方「来る」は「話し手の」視点に近づく動きを表す。

例として、太郎が花子のところに移動する場合を考えてみる。

(21)　ａ．視点が太郎にある場合：典型的には、話し手が太郎と一緒にいる場合

出発点　　到着点

太郎 ⟶ 花子　　行く（太郎は花子のところに行った）

ｂ．視点が花子にある場合：典型的には、話し手が花子と一緒にいる場合

出発点　　到着点

太郎 ⟶ 花子　　来る（太郎は花子のところに来た）

英語の go/come も基本的には日本語の「行く・来る」と同じである。

(22)　ａ．出発点到着点

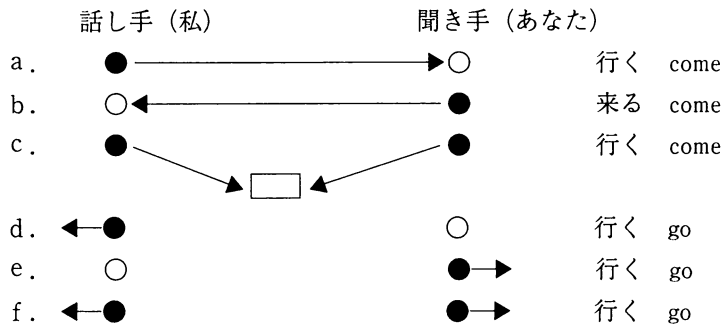
Taro ⟶ Hanako　　go (Taro is going to Hanako)

ｂ．出発点　　到着点

Taro ⟶ Hanako　　come (Taro is coming to Hanako)

しかし、第三者同志の行き来ではなく、話し手と聞き手の間の移動を述べる場合、(17-18)で見たように、日本語の「行く・来る」と英語の go/come の用法にずれがでてくる。話し手と聞き手の間の移動パターンと「行く・来る」と go/come の使い分けを、具体的に見てみよう。話し手と、聞き手の間の移動パターンは(23)の六通りある。それぞれの、移動のパターンを表すのにどちらの動詞が用いられるか見てみよう。

(23)　●：移動する人　　視点：常に話し手



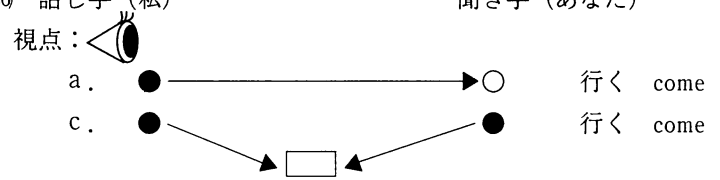
日本語と英語の具体例は(24-25)のとおり。

(24)　a．私は、3時にあなたのところに行きます。
　　b．あなたは、3時に私のところに来なくてはいけません。
　　c．私は、3時にパーティーに行きますので、そこでお会いしましょう。
　　d．私は、夏休みにハワイに行きます。
　　e．あなたは、この書類を持って東京の本社に行かなくはなりません。
　　f．明日、私は東京へ、あなたは京都へ行くことになっています。

(25)　a．I'm coming to you soon.
　　b．You must come to me at 3 o'clock.
　　c．I will come to your office about 3 o'clock tomorrow afternoon. Please be there.
　　d．I'm going to Hawaii this summer.
　　e．You have to go to Tokyo to attend the meeting.
　　f．If you want to go to Kyoto, I 'll have to go to Tokyo.

日本語と英語で決定的に違うのは(23)のａとｃの場合である。この二つに共通しているのは、どちらも話し手が聞き手が居るところに移動しているという点である。この場合、日本語では「行く」を用いるが、英語では go は使われず、「行く」とは逆の意味の come が用いられなくてはならない。[5] この場合(20)で示した基本パターンから逸脱しているのは日本語ではなく英語の用法である。(23a,c)の移動パターンを「話し手の視点」という観点で考えてみよう。(23)は全て話し手が関わる出来事なので、「発話当事者の視点ハイアラキー」から視点は常に話し手の側（ａ，ｃの場合出発点）にある。

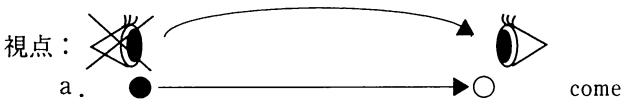
(26)　話し手（私）　聞き手（あなた）



このどちらの場合も、話し手の移動は視点から遠ざかる移動で基本的には(20)から、日本語では「行く」、英語では go が用いられるはずである。しかし、英語ではこの基本パターンとは逆に、話し手の視点に近づく動きを表す come が用いられる。

この場合の come の用法を説明するのに「視点の移行」という考えをが有効である。いま問題にしているケースのように、話し手と聞き手が関わる出来事がある場合、英語の話者は自分の視点を聞き手のところに一時移して出来事を眺めると仮定しよう。話し手が聞き手のところに移動する場合(23a)を例に、「視点の移行を」考えてみよう。

(27)　話し手（私）　聞き手（あなた）



(5)　次の例のように、(24a,c) のケースで go が用いられる特殊な状況については、大江 (1975:43-44) 参照。

I came / went to you last night. Don't you remember it?

この場合、話し手が自分の視点を聞き手のところに一時移行し、そこから自分の動きを眺めていると考える。こう考えることで、何故この場合 come が用いられるか説明できる。話し手は、視点を聞き手の場所に移行することで、自分の視点を到着点におくことになる。その結果、移動は出発点からみた移動ではなく到着点に向かう移動となり、go ではなく come が用いられるのである。

「視点の移行」というのは、もしこのケースだけにしか当てはまらないとしたら、一般性のない非常に奇妙な考え方ということになるが、実際に話し手から聞き手への「視点の移行」が英語ではかなり一般的にみられる現象であることを示す証拠がある。(28-29)の日本語と英語の指示表現の用い方の違いがその例である。

(28) a．そちらどなたですか？
　　b． Who is this?
　　c．そちら太郎ですか？
　　d． Is this Taro?
(29) a．このあたりはいかがでしょうか？
　　b． How about there?
(30) a．これでもくらえ／これで分かったか。
　　b． Take that.

(28)は電話の会話である。電話で相手を指すのに、日本語は「そ系」の指示語「そちら」を用いるが、英語（特に米語）では、日本語の「こちら」に当たる this を用いる。これは、「話し手の視点」が一時的に話し手を離れ聞き手の側に移行していることを示している。

もちろん、日本語では、面と向かって話している相手を指して「こちら」とはいえない。このことは、日本語では聞き手への「話し手の視点」の移行が不可能であることを意味している。

(29-30)は、逆に、話し手が自分の手元にあるものを指すのに、there, that を用いている例である。[6] (29)を例にとる。これは、店員が客にシャツの

(6) 国広（1985:103）を参照。

ロゴをどこに入れるか尋ねている文と考えて頂きたい。店員が、自分でシャツを手に持ち、どこにマークを入れるかを相手に尋ねる場合は、日本語では「こ系」の語しか用いない。自分でシャツを持ち、そのシャツの上を指さし、「そこ」や「あそこ」とは言えないであろう。しかし、英語ではこの場合、「そこ／あそこ」に相当する there を用いることができる。この場合も、話し手は、自分の視点を相手に移し、相手の立場で自分の持っているシャツを見ていることを示している。

日英語の指示表現についての、いま見たコントラストは、先ほどの、「行く／来る」と go/come の違いと平行している。つまり、これらの例に共通して言えることは何かというと、英語では日本語に見られない聞き手への視点の移行が起こっていることである。(7)

この日英語のコントラストは、前節でみた「発話当事者の視点ハイアラキー」という視点制約に照らしてみると次のように言える。(「発話当事者の視点ハイアラキー」とは、話し手の関与する出来事を述べるときには、視点は常に話し手自身になくてはならないというものである。) 日本語は、聞き手への視点の移行が不可能なため、この制約に強く従う言語といえる。一方、英語は、聞き手への視点の移行によりこの制約を回避できるタイプの言語なのである。(8)

---

(7) 視点の移行自体は、話し手が関与しない出来事を述べるときには日本語でも見られる。

a．太郎は花子の家に3時に来ることになっている。

b．太郎は君のうちにいつ来ることになっているの？

例えば、(a) は、話し手も花子の家に行くことになっている場合は自然な言い方である。この場合は、話し手は、発話時に花子の家に居なくてもそこに自分の視点を移動して「花子の家に来る」という言い方ができる。問題は、話し手と聞き手が関わる出来事を述べる場合、話し手の聞き手への視点の移行が英語では可能なのに日本語ではできないという事実である。

(8) 国広 (1985:104) では、この日英語のコントラストは日本語の方言間にも存在する可能性があることが指摘されている。これまで用いてきた日本語のデータは、標準的日本語 (東京方言) である。しかし、九州や沖縄などでは、自分が相手のところに移動するのに「行く」ではなく「君のうちにくるけん」のように「来る」を用いるという。これは、これらの方言では英語と同じ聞き手への視点の移行が起こっていることを示唆している現象である。

参考文献

Fillmore, Charles J. (1966) "Deictic Categories in the Semantics of 'Come'," *Foundations of Language* 2, 219-227.

久野　暲(1978)『談話の文法』　大修館書店、東京。

国広　哲弥(1985)「言語学道場」『言語』第14巻第3号、大修館書店、東京。

Kuno, S. (1987) *Functional Syntax. Anaphora, Discourse and Empathy*, The University of Chicago Press.

Kuno, S. and E. Kaburaki (1977) "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8.4, 627-672.

大江　三郎(1975)『日英語の比較研究』　南雲堂、東京。